

# 平成27年度 (2015年度)

業務年報

Annual Report for the year 2015

(平成29年3月)

# 地方独立行政法人 青森県産業技術センター野菜研究所

Local Independent Administrative Institution

Aomori Prefectural Industrial Technology Research Center

Institute of Vegetable Research

# 平成27年度 業務年報 目次

		頁
I	試験研究	1
1	試験研究課題	1
2	試験研究概要	5
3	主要な野菜・畑作物の生育状況	1 0
4	気象表・図	1 2
П	試験研究成果・普及情報の公表及び研修・技術協力	1 5
1	試験研究成果・普及情報	1 5
	(1) 普及技術情報	1 5
	(2) 刊行物	1 6
	(3) 学会・研究会	1 6
	(4) 試験研究成果発表会	1 6
	(5) 公開デー	1 7
	(6) 一般雑誌・普及誌・新聞・テレビ・ラジオ	1 7
	(7) 表彰	1 8
2	研修・技術協力	1 9
	(1) 農業ドクター	1 9
	(2) 野菜研主催研修	1 9
	(3) 講師派遣	2 0
	(4) 審査員派遣	2 1
	(5) 会議・研究会	2 2
	(6) 視察受け入れ	2 4
	(7) 研修受け入れ	2 4
Ш	職員研修	2 4
1	国内研修	2 4
2	県・産技研修	2 5
IV	種苗の生産と配布	2 6
1	作物の原原種の採種	2 6
2	作物の原種の採種	2 6
3	種苗等の配布	2 6
V	資格取得	2 7
VI	総務	2 8
1	位置・土地・建物	2 8
2	所掌事務・分掌事務	2 8
3	組織・職員	2 8
4	事務分担	2 9
5	予算	3 3
VII	圃場利用図	3 6

## 1 試験研究課題

# (1) 栽培部

_	課題	細 目 課 題	研究期間
ž	青森ブランド野菜の高	1 ナガイモの高品質安定生産技術の開発	平26~30
15.	品質安定生産技術の開	(1) ナガイモ栽培技術改善試験	
	発(開発研究)	ア 土壌消毒処理の有無と適正施肥窒素量の把握	
		イ 品質低下要因の解明	
		ウ 高支柱栽培の適応性評価	
		2 ニンニクの新作型開発による安定生産技術	
		(1) 珠芽を利用した新作型開発試験	
		3 夏秋どりイチゴの高品質安定生産技術	
		(1) 良食味四季成り性イチゴ「なつあかり」の安定多収技術の確	
		立	
		(2) 主要四季成り性品種の好適栽培法の開発	
Ī	ナガイモ「園試系6」	1 「園試系6」の品種特性を発揮できる土壌・地域別施肥基準の	平26~27
	の収量・品質向上に向	作成(現地試験)	
	けた施肥の改善	2 土壌の簡易地力窒素診断法の実用性評価	
	(県重点事業「ながい	3 作業省力化のための感光性肥料の利用	
	も産地生産力レベルア		
	ップ事業」)		
ĺ	ニンニクの流通過程で	1. 流通過程での品質実態調査	平26~27
	の品質低下要因の解明	(1) 生産者による収穫後の乾燥実態と氷点下貯蔵後の品質	
	と対策技術の確立	(2) 卸売市場における品質調査	
	(県重点事業「青森に	2. 氷点下貯蔵後の品質に及ぼす栽培条件等の影響	
	んにく安心技術確立事	(1)マルチの種類、収穫の早晩が貯蔵品質に及ぼす影響	
	業」)	(2014年収穫、障害調査)	
		(2)種子りん片重、糖度、乾物率が貯蔵品質に及ぼす影響	
		(2015年収穫物調査)	
		(3) 品種、マルチの種類、成熟度が貯蔵品質に及ぼす影響	
		(2015年収穫物調査)	
	良食味夏秋イチゴ「な	1 プレミアムなつあかりの創出	平26~27
	つあかり」による青森	(1) なつあかり果実高品質化のための要因解析	
	県高付加価値技術創出	(2) うどんこ病防除のための紫外線照射効果	
	実証モデル(県重点事		
	業「青森県高付加価値		
	技術創出実証モデル事		
	業」)		
	冬の農業生産体制の強	1 冬野菜品目の拡大	平26~27
	化 (県事業:冬の農	(1) ミニ白菜、カブ	
	業生産体制強化事業)		
	野菜の栽培試験	1 野菜の作況試験	平25~平30
	(支援研究)	(1) ナガイモ	
		(2) ニンニク	
		ア 気象及び生育経過	
		イ 収量及び品質	
	野菜の除草剤、生育調	1 除草剤	平27
	整剤の開発 (受託:	(1) ネギ	
Į	日植調)		
	小川原湖しじみ生育環	1. 堆肥成分	平27~28
	境保全のための水草の	2. ナガイモ	
	堆肥利用評価 (野菜)	3. ダイコン	
	<b>地</b> 加州計価(野米)	O. クイユン	

## (2) 品種開発部

\ \ \ \ \	/ 阳堡闭光的		Т
野	特産野菜優良品種の育	1 ナガイモ優良品種の開発	平19~30
菜	成	(1) 育種素材の育成	
	(開発研究)	(2) 育成系統の栽培特性	
		(3)遺伝資源の収集・保存	
		2 ニンニク優良品種の開発	
		(1) 育種素材の育成	
		(2) 系統選抜による品種育成	
		(3) 遺伝資源の収集・保存	
		3 エダマメ優良品種の開発	平19~30
		(1)優良品種の育成	
		(2) 遺伝資源の収集・保存	
		4 イチゴ優良品種の開発	平19~30
	特産野菜原原種維持増	ナガイモ・ニンニクの種苗増殖と配布	平17~30
	殖事業 (支援研究)		
ŀ	「伝統野菜」活用促	「伝統野菜」活用促進事業	平26~27
	進事業(県重点事業		
	「「伝統野菜」活用促		
	進事業」)		
ŀ	「南部太ねぎ」の特性	「南部太ねぎ」の特性に係わる栽培試験	平26~27
	に係わる栽培試験		
	(受託:南部町)		
畑	もち小麦の需要に伴う	小課題:栽培農家の確保、安定供給、全国小麦栽培地への働きか	平25~27
作	生産体制と、全国への	け	
物	振興、普及活動(受	(1) 積雪メッシュデータによる栽培適地判断の検討	
	託:青森県立保健大	(2) 外観と内容成分からみたもち小麦の収穫適期	
	学、これまでの事業	(3) RVAによるもち小麦の小麦粘度推定の検討	
	/ヒト介入試験に基		
	づく、もち小麦から		
	の新食感食品開発)		
ŀ	ソバ育種研究に係る系	ソバ育種研究に係る系統適応性・特性試験	平27~28
	統適応性・特性試験		
	(受託:農研機構)		
•	水田の高度利用を目的	水田の高度利用を目的としたカスケート利用可能なナタネ品種の育成	平26~平27
	としたカスケート利用可能		
	なナタネ品種の育成寒		
	(受託:農研機構)		
	畑作物優良品種の選定	1 畑作物優良品種の選定	平26~30
	(支援研究)	(1) 小麦優良品種の選定	
		(2) 小麦系統適応性検定試験	
		(3) 大豆優良品種の選定	
		2 畑作物等原原種の維持・増殖	
		   (1) 畑作物(なたね、そば)の原原種の維持及び増殖	
		3 畑作物の栽培試験	
		(1) 畑作物の作況調査	
		アール表	
		イ大豆	
ŀ	畑作物原種の生産・供	なたね、そばの原種生産	平26~30
	給 (支援研究)		. = - • •

# (3)病虫部

課題	細目課題	研究期間
特産野菜の気象変動に対	1 特産野菜に発生する病害虫の高感度診断技術の開発と気象変動に適	平26~30
応した青森型総合病害虫	応した発生生態の解明	
防除技術の開発	(1) 病害虫診断と発生実態	
(開発研究)	アーイチゴ病害の発生状況	
	イ トマト病害の発生実態	
	ウ 県内地域におけるネコブセンチュウ類の発生実態	
	(2) 病害虫の発生生態と防除技術	
	ア キスジノミハムシの発生消長調査	
	イ ダイコンのキスジノミハムシ多発条件下での防除技術の検討	
	(ア) は種時にフォース粒剤を施用した場合の防除開始時期の検討	
	(イ) 粒剤の処理方法の検討	
	(ウ) フォース粒剤の株元散布の防除効果	
	ウ ナガイモ斑点性病害の発生生態と防除	
	2 クロルピクリン土壌くん蒸剤に頼らない土壌病害虫防除技術の開発	
	(1) 被覆資材の違いによるクロルピクリンのガス濃度の変化	
	(2) 殺菌剤及び殺虫剤の植溝混和による防除効果	
	アーゴボウの十壌病害虫防除効果	
	3 土壌微生物相診断に基づいたニンニク土壌病害虫の総合防除技術の	
	開発	
	(1) ガス難透過性フィルムによる土壌くん蒸剤の畦内処理の検討	
	(2) 黒腐菌核病及びイモグサレセンチュウ多発ほ場における各種土壌	
	処理の効果	
	4 特産野菜の優良種苗を活かすためのウイルス病害制御技術の開発	
	(1) 障壁作物を利用したナガイモえそモザイク病制御技術の開発	
	(2) 障壁植物や薬剤を活用したニンニクモザイク病の感染防止技術	
	5 天敵等の生物多様性を活かした減農薬栽培のための病害虫防除技術	
	の開発	
	(1) 天敵など生物農薬を利用した野菜の病害虫防除法の開発	
	ア 夏秋どりイチゴのアザミウマ類に対する捕食性天敵アカメガシワ	
	クダアザミウマと薬剤併用の防除効果	
	(2) 減農薬のための効果的な病害虫防除法の開発	
	ア ヤマセ地域のニンニク病害が収量・品質に及ぼす影響	
	イ ニンニクの同一殺菌剤2回連続散布の防除効果と病原菌の薬剤	
	感受性調査	
ニンニク線虫被害防止	1 土壌病害虫防除対策の確立	平26~27
技術(県重点事業「青	(1) 血清学的手法によるイモグサレセンチュウの検出法	
森にんにく安心技術確	(2)遺伝子解析法等によるイモグサレセンチュウの高感度検出	
立事業」)	法	
イモグサレセンチュウ	イモグサレセンチュウ発生圃場における石灰窒素の防除効果に関	平26~27
発生圃場における石灰		
窒素の防除効果に関す		
る研究 (受託:コープケ		
<ul><li>ミカル)</li></ul>		
業務加工用に適したた	業務加工用に適したたまねぎ品種及び栽培技術の確立	平26~30
	(品種開発部と課題分担)	, 20 00
まねぎ品種及び栽培技	(四性   光	
まねぎ品種及び栽培技 術の確立	(四性用光部と味趣力担)	
まねぎ品種及び栽培技 術の確立 (受託:農研機構)		平26~30
まねぎ品種及び栽培技 術の確立 (受託:農研機構) オリジナル品種「たっ	オリジナル品種「たっこにんにく」をまもる弱毒ウイルスの利用	平26~30
まねぎ品種及び栽培技 術の確立 (受託:農研機構) オリジナル品種「たっ こにんにく」をまもる		平26~30
まねぎ品種及び栽培技 術の確立 (受託:農研機構) オリジナル品種「たっ	オリジナル品種「たっこにんにく」をまもる弱毒ウイルスの利用	平26~30

病害虫防除農薬開発	1 主要病害に対する新農薬の防除効果	平26~30
(受託:県植防)	(1) ダイコンの白さび病	
	(2) ダイコンの白さび病 (土壌混和)	
	(3) ダイコンのわっか症	
	(4) ネギのリゾクトニア葉鞘腐敗病	
	(5) ネギの小菌核腐敗病	
	(6) ヤマノイモの青かび病	
	(7) ヤマノイモの葉渋病	
	(8) ニンニクの黄斑病	
	(9) ニンニクの白斑葉枯病	
	(10) ニンニクの葉枯病	
	(11) ニンニクのさび病	
	(12) ニンニクの春腐病	
	(13) ニンニクの黒腐菌核病 (土壌混和)	
	(14) ニンニクの黒腐菌核病 (種子消毒)	
	2 主要害虫に対する新農薬の防除効果	
	(1) ヤマノイモのワタアブラムシ(土壌処理剤)	
	(2) ヤマノイモのナガイモコガ	
	(3) ダイコンのキスジノミハムシ	
	(4) ネギのネギアブラムシ	
	(5)ゴボウのヒョウタンゾウムシ類(土壌処理剤)	
	(6) ゴボウのヒョウタンゾウムシ類(茎葉散布)	
	(7) 露地キュウリのハダニ類	
	(8) イチゴのアザミウマ類	
	(9) ニンニクのアブラムシ類	
	(10) ニンニクのネギコガ	
マイナー作物農薬登録	1 食用ギク灰色かび病に対するセイビアーフロアブル20の防除効果及	平27
拡大事業(県事業:マイ	び倍量薬害試験	
ナー作物農薬登録拡大事		
業)		
抗線虫資材の選定	抗線虫資材の選定	平26~30
(受託:農研機構)		
新規還元土壤消毒技術	新規還元土壌消毒技術の開発	平26~30
の開発(受託:農研機		
構)		
異なるクロルピクリン処	異なるクロルピクリン処理量と被覆資材の組み合わせによるニンニク土	平26~27
理量と被覆資材の組み合	壌病害虫の防除効果	
わせによるニンニク土壌	1	
1		
病害虫の防除効果(受		

### 2 試験研究概要

## (1)栽培部

## ア 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術の開発 (ア)ナガイモの高品質安定生産技術の開発 aナガイモ栽培技術改善試験

### (a) 土壌消毒処理の有無と適正施肥窒素の把握

土壌消毒条件での従来からの施肥基準である 基肥窒素0.6kg/a+追肥窒素0.3kg/a×3回体系は 「園試系6」においても多収で、いも形状が比 較的安定していた。

### (b) 品質低下要因の解明

土壌消毒により、いもの肥大や収量はやや増加し、また、平いもの発生はやや増加するが、こぶいもの発生はやや減少した。無追肥は、平いも、またはこぶいもの発生を増加させた。

追肥の間隔をあけることにより、平いも、こぶいもの発生は総じて若干増加するように見られるが、特定の障害との相関は明瞭ではなかった。

### (c) 高支柱栽培の適応性評価

270cmの高支柱栽培はいもの肥大を促進したが、平いもの発生が増加した。密植することによに高支柱の増収効果が高まり、平いもや尻こぶの発生が軽減される。

## bニンニクの新作型開発と高品質安定生産技 術の開発

### (a)珠芽を利用した新作型開発試験

珠芽から効率的に種子りん片を得るには、 $1\sim$ 3gの珠芽に5 $\mathbb{C}$ ・2週間処理を加えて植え付け、さらに秋期のトンネル被覆処理を実施することが有効であった。

## (ア) 夏秋どりイチゴの高品質安定生産技術 a良食味四季成り性イチゴ「なつあかり」の 安定多収技術の確立

長日処理条件下における「なつあかり」の総収量は180日タイプの肥料を使用して施肥窒素量2.5g/株とした場合に最も多くなった。

### b主要四季成り性品種の好適栽培法の開発

すずあかね、なつあかり大苗は花房を放任すると総収量、秀優品収量が最も多く、信大BS8-9、なつあかり小苗は5月14日まで花房を摘除すると総収量、秀優品収量が最も多くなった。すずあかねでは、花房を放任すると収量が多くなるが、生育後半には芯止まりぎみとなった。

## イ ナガイモの収量・品質向上に向けた施肥 の改善

# (ア)「園試系 6 」の品種特性を発揮できる土壌・地域別施肥基準の作成(現地試験)

県内各地のナガイモ産地において野菜研慣行施肥体系および各地における慣行施肥体系での生育、収量を検討したところ、各地における慣行施肥体系は、おおむね野菜研慣行区よりも総収量、A品収量ともやや高く、地域の気象土壌、条件に適応した体系であると考えられた。一方、野菜研慣行施肥体系も各地において比較的安定した収量品質を上げており、県内の広く全般的な条件に、比較的よく適応した体系であると考えられた。

# (イ)土壌の簡易地力窒素診断法の実用性評価

COD簡易測定キットによる簡易測定により、可 給態窒素量の推定が可能であった。

### (ウ)省力施肥法の検討

被覆窒素配合肥料を使用した全量基肥体系は 慣行施肥体系と収量、品質はほぼ同等であった。 被覆窒素配合肥料+8月6日の1回追肥体系では平 いもの発生も少なく、A品収量が高まった。

## ウ ニンニクの流通過程での品質低下要因の 解明と対策技術の確立

## (ア)流通過程での品質実態調査

## a生産者による収穫後の乾燥実態と氷点下 貯蔵後の品質

野菜研におけるテンパリング乾燥は連続乾燥、現地慣行乾燥よりくぼみ症の発生が少なかった。-2℃貯蔵よりも-3℃で貯蔵した方がくぼみ症の発生が多かった。2月出庫と6月出庫では6月出庫の方がややくぼみ症の発生が少ない傾向が見られた。

### b卸売市場における品質調査

2月出庫ではA市場、B市場では80%以上のりん球でくぼみ症が発生し、2月出庫ではくぼみ症の発生が少なかったC市場、D社においても6月出庫では60%以上でくぼみ症の発生がみられた。

## (イ)氷点下貯蔵後の品質に及ぼす栽培条件等 の影響

# aマルチの種類、収穫の早晩が貯蔵品質に及ぼす影響

障害りん球数は、テンパリング乾燥よりも連 続乾燥で、また、-2℃貯蔵よりも-3℃貯蔵で発 生が多かった。収穫の早晩、マルチ色の違いに よる障害発生割合には一定の傾向は認められな かった。

## b種子りん片重、糖度、乾物率が貯蔵品質に 及ぼす影響

上物収量は、種りん片重にかかわらず6月15日 ~6月25日までは大きく変わらず、6月25日以降低下した。糖度は6月25日まで40%にまで急激に増加した。りん片の乾物率は、6月25日には種子りん片重にかかわらず33%程度であった。

## c品種、マルチの種類、成熟度が貯蔵品質に 及ぼす影響

生育、収量からみた収穫適期は白玉王は透明マルチが6月26日、緑および黒マルチは7月3日頃と考えられ、黒石Aはいずれのマルチも6月26日頃と考えられた。透明マルチは球重、球径が増加しやすいが、収穫適期以降の割れ発生率が多かった。

# エ 良食味夏秋イチゴ「なつあかり」による 青森県高付加価値技術創出の実証モデル

### (ア)プレミアムなつあかりの創出

### aなつあかり果実高品質化のための要因解析

栽培前半の5~6月と後半の10~11月の糖酸比が高く食味が良いと考えられた。また、一般的に酸度が高いとされる時期において酸度が低下する現象が確認され、環境制御によって内部品質を向上できることが示唆された。

### bうどん粉病防除のための紫外線照射効果

紫外線光源をなつあかりの株上80cmに設置し、1.5時間照射することで、うどんこ病の発病を抑制できることが明らかとなった。紫外線照射による収量の変化はなかった。

#### オ 野菜の栽培試験

## (ア)野菜の作況試験

ナガイモの総収量は平年並で(403kg/a、平年比94%)、平いもが多く、品質は平年より下回った。ニンニクの収量は平年を上回り(168kg/a、平年比115%)、品質は平年を上回った。

### カ 野菜の除草剤、生育調節剤の開発

ネギの生育期全面茎葉処理におけるリニュロン水和剤の処理ではいずれの薬量とも一年生雑草に対する十分な殺草効果は認められなかった。処理翌日早朝より翌々日午前中にかけて150mmに近い降雨があり、また、この間平均8~10m、瞬間最大で20m前後の風があり、薬剤の定着が損なわれた影響があったものと考えられる。各薬量とも気象条件が結果に大きく影響したと考えられ、実用化の判断はできなかった。

## キ 小川原湖しじみ生育環境保全のための水草の堆 肥利用評価(野菜)

#### (ア)堆肥成分

水草堆肥は、牛ふん堆肥よりECが低く、pH は同程度で可給態窒素量はやや多い。全窒素、 炭素率、リン酸、カルシウムはやや少なく、 カリウム、ナトリウムはやや多い。

#### (イ) ナガイモ

小川原湖の藻類を原料とした水草堆肥区は 牛ふん堆肥区より収量が多く、A品率も高い ため牛ふん堆肥の代替として利用可能であ る。

### (ウ) ダイコン

水草堆肥区は牛ふん堆肥区より収量が多いが、岐根の発生率が高まる可能性があるため、利用時には前年に堆肥を施用するなどの注意が必要である。

## (2) 品種開発部

### ア 特産野菜優良品種の育成

### (ア)ナガイモ優良品種の開発

### a 優良品種の育成

### (a) 育種素材の養成

350系統から良好な110系統を選抜した。

#### (b)遺伝資源の収集・保存

ナガイモを含むヤマイモ43系統を継代栽培 し、遺伝資源として保存した。保存している 11系統を茎頂培養した。

### (イ)ニンニク優良品種の開発

### a優良品種の育成

### (a)育種素材の養成

23年採種種子からの実生株をガラス網室で養成し、14系統について次代の種球を得た。

### (b)系統選抜による品種育成

「福地ホワイト」(黒石A系統)の中から 選抜した有望系統を栽培試験に供試した結 果、E1、E4をやや有望とした。

### (c)遺伝資源の収集・保存

ウイルスフリー化された17系統の隔離栽培による維持を行うとともに新たに茎頂培養を行った15系統から次代の種球を収穫した。

### (ウ)エダマメ優良品種の開発

#### a優良品種の育成

F5世代では112個体を選抜し、F6世代では1

1系統を選抜した。

#### b遺伝資源の収集・保存

エダマメ等の種子24系統を保存した。

#### (エ)イチゴ優良品種の開発

収量・品質を比較した結果、TK10(四季成り)とTK5(一季成り)を有望とし、TK15(四季成り)を再検討とした。

#### イ 特産野菜原原種維持増殖事業

ナガイモ、ニンニクのウイルスフリー株を維持、増殖し、生産現場における優良種苗の確保を図る目的で、ナガイモは直径7.5mm以上のむかご115kg、ニンニクはりん球と珠芽計400kgをJA全農あおもりに供給した。

### ウ「伝統野菜」活用促進事業

「筒井紅かぶ」1353g、「笊石かぶ」517g の種子を収穫し、栽培試験で形質を確認した。 エ これまでの事業/ヒト介入試験に基づく、 もち小麦からの新食感食品開発

もち小麦の需要に伴う生産体制と、全国への 振興、普及活動

栽培農家の確保、安定供給、全国小麦栽培地 への働きかけ

## (ア) 積雪メッシュデータによる栽培適地判 断の検討

青森県内の気象観測地点における長期積雪期間の平年値とその再現期間を算出した。「メッシュ平年値2010」の最深積雪データ等を用いて県内の長期積雪期間の平年値、地形因子を用いて推定する方法により栽培適地マップを作成した。

## (イ)外観と内容成分からみたもち小麦の収 穫適期

出穂後積算気温からみた「もち姫」の収穫 目安である子実水分30%になるときは850~9 50℃と判断された。

### カ 寒冷地におけるそば育成系統の特性評価

「階上早生」と比較して、供試した全ての 系統は子実重が劣ることに加え、容積重が劣 ることから、「劣る」と判定した。

### キ 寒冷地におけるなたね育成系統の特性評価

地域適応性を検討するために6系統を供試し、「東北101号」を有望として選抜した。

### ク 畑作物優良品種の選定

### (ア)畑作物優良品種の選定

### a小麦優良品種の選定

「東北232号」は、短稈、大粒で容積重が大きく、収量が優り、有望と判定した。

### b小麦系統適応性検定試験

東北農業研究センターが育成した10系統を供試し、3 系統を再検討と判定した。

### c大豆優良品種の選定

「シュウリュウ」を再検討と評価した。

### (イ) 畑作物等原原種の維持・増殖

## a畑作物等(なたね、そば)の原原種の維持及び増殖 そば品種「階上早生」を網室内で隔離栽培により増 殖した。

#### (ウ) 畑作物の栽培試験

### a畑作物の作況試験(小麦)

小麦の生育、収量を気象条件との関連で検討したところ、出穂期は平年より15日早い5月10日、成熟期は平年より12日早い6月30日、子実重は74.7kg/a(平年比126%)となった。

### b畑作物の作況試験(大豆)

大豆の生育、収量を気象条件との関連で検討したところ、開花期は平年並で、子実収量は30.4kg/aで平年比108%となった。

### ケ 畑作物原種の生産・供給

「階上早生」の原種子を37kg生産した。

## (3)病虫部

ア 気象変動や生物多様性に適応した特産野菜の安全・安心な病害虫管理技術の研究開発 (ア)特産野菜に発生する病害虫の高感度診断技術の開発と気象変動に適応した発生生態のの解明

### a病害虫診断と発生実態

### (a)イチゴ病害の発生状況

購入したイチゴ品種すずあかね苗から、炭 疽病、萎黄病、萎凋病、線虫病は検出されな かった。

### (b)トマト病害の発生実態

七戸町で青枯病とかいよう病、三戸町と南 部町で褐色根腐病の発生が確認された。また、 三戸町で萎凋病と根腐萎凋病、南部町で紅色 根腐病が確認された。

### (c)ネコブセンチュウ類の発生実態

PCR-RFLP法と形態観察の結果、新種のネコブセンチュウである可能性があるので、ヤマノイモネコブセンチュウと仮称した。 JA八戸管内で発生していた種は、ヤマノイモネコブセンチュウ及びサツマイモネコブセンチュウと推定された。

### b病害虫の発生生態と防除技術

## (a)ダイコンのキスジノミハムシの発生消長 調査

キスジノミハムシ成虫の誘殺は、黄色粘着トラップでは前年より1半旬早い7月第6半旬が発生盛期で、誘殺数は前年より少なかった。

## (b)ダイコンのキスジノミハムシ多発条件下 での防除技術の検討

## ①は種時にフォース粒剤を施用した場合の防 除開始時期の検討

ダイコンのキスジノミハムシ中~多発生条件下では、は種時にフォース粒剤4kg/10aを播溝土壌混和した場合の茎葉散布は、は種2週間後までに開始する必要があると考えられた。

### ②粒剤の処理方法の検討

ダイコンのキスジノミハムシに対するフォース粒剤のは種時播溝土壌混和の被害抑制効果の持続期間は、3cm程度の浅めの混和の方が12cm程度の深めの混和よりもやや長かった。また、フォース粒剤のは種時播溝土壌混和と生育期のダイアジノン粒剤5の表面散布の組み合わせにより被害抑制効果はやや高まるが、その程度は低かった。

### ③フォース粒剤の株元散布の防除効果

ダイコンのキスジノミハムシに対し、フォース粒剤の土壌表面散布は防除効果が認められた。

### (c)ナガイモ斑点性病害の発生生態と防除

ナガイモ灰色かび病の発生はなく、発生生態の調査や薬剤散布の効果判定できなかった。

## (イ)クロルピクリン土壌くん蒸剤に頼らない 土壌病害虫防除技術の開発

# a 被覆資材の違いによるクロルピクリンのガス濃度の変化

ハイバリアーの使用により周囲環境へのガスの揮散を抑えることができると考えられる。また、ハイバリアーの使用でクロルピクリン使用量の減量に期待できる。

# b 殺菌剤及び殺虫剤の植溝混和による防除効果

### (a)ゴボウの土壌病害虫防除効果

モンガリット+ネマキックのネグサレセン チュウに対する効果は低く、黒あざ病に対す る効果は、判然としなかった。

### (ウ)土壌微生物相診断に基づいたニンニク土

### 壤病害虫の総合防除技術の開発

## aガス難透過性フィルムによる土壌くん蒸剤 の畦内処理の検討

イモグサレセンチュウに対する防除効果では、被覆資材による効果の差は無いと考えられた。黒腐菌核病及び紅色根腐病の防除効果は、クロピクでは被覆資材による差がなく、ダゾメットではハイバリアーの方が高い傾向にあった。

## b黒腐菌核病及びイモグサレセンチュウ多発 ほ場における各種土壌処理の効果

黒腐菌核病及びイモグサレセンチュウ多発 条件下での転炉石灰処理はダブメット粉粒剤 マルチ畦内処理に比べ、黒腐菌核病、イモグ サレセンチュウに対して期待されていた効果 は得られなかった。

# (エ)特産野菜の優良種苗を活かすためのウイルス病害制御技術の開発

## a障壁作物を利用したナガイモえそモザイク 病制御技術の開発

インゲンマメはCYNMVの感染は防ぐことはできたがBBWV2を媒介する可能性がある。

# b 障壁植物や薬剤を活用したニンニクモザイク病の感染防止技術

銅水和剤散布によるウイルス再感染制御の 効果は明確に判然としなかった。また、LYSV の越冬前感染が確認された。

# (オ)天敵等の生物多様性を生かした減農薬栽培のための病害虫防除技術の開発

a天敵など生物農薬を利用した野菜の病害虫 防除法の開発

## (a) 夏秋 どりイチゴのアザミウマ類に対する 捕食性天敵アカメガシワクダアザミウマと薬 剤併用の防除効果

「すずあかね」でも薬剤散布とアカメガシワクダアザミウマの併用はアザミウマ密度を抑制し、被害果の発生を低く抑えることができた。また、ミヤコカブリダニパック製剤を格納したバンカーシートの設置はハダニ密度を抑制し、アカメガシワクダアザミウマとの併用も可能であった。

# b減農薬のための効果的な病害虫防除法の開発

## (a)ヤマセ地域のニンニク病害が収量・品質 に及ぼす影響

地上部の病害が甚発生となることで収量が 減少すると考えられた。

### (b) ニンニクの同一殺菌剤連続散布の防除効

### 果と病原菌の薬剤感受性調査

QoI剤及びDMI剤に対するさび病耐性菌の発生は認められず、同一系統でも殺菌剤によって防除効果に差があることが明らかとなった。

## イ マイナー作物農薬登録拡大事業

# (ア)食用ギク灰色かび病に対するセイビアーフロアブル20の防除効果及び倍量薬害試験

供試したセイビアーフロアブル20の防除効果は、対照薬剤のカンタスドライフロアブルと同等で、無処理区に対しても効果は認められ、実用性はあると思われた。倍量濃度でも薬害は認められなかった。

## ウ イモグサレセンチュウ発生圃場における 石灰窒素の防除効果の検討

石灰窒素は、イモグサレセンチュウ、黒腐菌核病及び紅色根腐病に対して期待された効果は得られなかった。

## エ 異なるクロルピクリン処理量と被覆資材 の組み合わせによるニンニク土壌病害虫の防 除効果

被覆資材によるガス濃度の変動については 検出器の不具合により明らかとはならなかっ た。

### 才 病害虫防除農薬開発

### (ア)主要病害に対する新農薬の防除効果

試験薬剤は、下記のとおりであり、いずれの剤も 防除効果があり、薬害は認められなかった。

- ・ヤマノイモの青かび病に対するホーマイ水 和剤の200倍10分間種いも浸漬
- ・ヤマノイモの葉渋病に対するフジドーLフロアブル500倍、ベンレート水和剤2000倍、メジャーフロアブル2000倍
- ・カブの白さび病に対するメジャーフロアブルの2000倍
- ・ダイコンの白さび病に対するメジャーフロアブルの2000倍
- ・ダイコンのわっか症に対するシグナムWDG 2000倍、メジャーフロアブルの2000倍
- ・ネギの葉枯病に対するメジャーフロアブル 2000倍
- ・ニンニクの黒腐菌核病に対するオルフィンフロアブル1%、0.5%、0.25%湿粉衣
- ・ニンニクの葉枯病に対するアミスターオプ ティフロアブル1000倍

#### (イ)主要害虫に対する新農薬の防除効果

試験薬剤は、下記のとおりであり、いずれの剤も 防除効果があり、薬害は認められなかった。

- ・ヤマノイモのワタアブラムシに対するダントツ粒剤の6kg/10a植付時作状処理土壌混和及び9kg/10a植付時作状処理土壌混和
- ・ダイコンのネグサレセンチュウに対するBC I-133粒剤20kg/10a散布後全面土壌混和
- ・ニンニクのイモグサレセンチュウに対する BCI-133粒剤の20kg/10a播種前全面土壌混和 ・ニンニクのネギコガに対するアディオン乳 剤の2000倍液散布及びダントツ水溶剤の2000
- ・ゴボウのアブラムシ類に対するアディオン 乳剤2000倍、サイアノックス乳剤1500倍
- ・ゴボウのヒョウタンゾウムシ類に対するア タブロン乳剤2000倍
- ・カボチャのカボチャミバエに対するダント ツ水溶剤の2000倍

### 3 主要野菜・畑作物の生育状況

### (1) 野菜

### ア ナガイモ

5月25日植付けの露地普通栽培とし、供試系 統は園試系6 (2年子)とした。

萌芽揃期は6月25日(平年より4日早く)、植付けから萌芽揃までの日数は31日(平年より3日短い)であった。7月21日以降、茎葉重が平年を上回り、地下部も平年を上回った。

9月の生育量は、地上部、地下部とも平年を 上回って推移したが、10月には平年並みとなっ た

総収量は、4,032kg/10a(平年比94%)、上 物収量は1,112kg/a(同71%)、平いもが多く、 コブ、溝、リング、曲がりが少なかったものの、 下物収量も平年より多かった(平年比:107%)。

表1 ナガイモの収量調査

種イモ	年次	総収量		上物収量	∄(kg/10a)		下物収量(kg/10a)						
性1七	平次	(kg/10a)	4L-3L	2L-L	M以下	計	平	曲がり	コブ・分岐	溝・リング	その他	計	
	本年	4,032	689	424	0	1,112	2,692	47	46	114	20	2,920	
2年子	平年	4,309	1,144	374	54	1,572	1,392	251	592	283	219	2,737	
	平年比	94	60	113	0	71	193	19	8	40	9	107	

注)平年:前8か年の平均値

上物収量:JA全農あおもりやさい出荷規格の「丸A」に相当する収量

### イ ニンニク

平成26年10月1日植付けの露地普通栽培とし、 供試系統は福地ホワイト(黒石A)を供試した。 りん片分化期が4月13日で平年より11日早ま った。収穫期は6月22日で平年(7月4日)より14 日遅かった。7月2日の平均乾燥球重は98.1gで 平年を上回り(平年比123%)、総収量は1,645 kg/10a(同115%)、上物収量が1,380kg/10a(同125%)であった。下物収量は295kg/a(同84%)で、奇形(同0%)は少なかったが、裂球が多かった(同135%)。

表2 ニンニクの収量調査

年次	収穫期	総収量		上物収量	∄(kg/10a)				下物収量	≣(kg/10a)		暦日(7月2日) 乾燥球重
	(月/日)	(kg/10a)	2L	L	М	S	計	奇形	裂球	その他	計	(g)
本年	6/22	1,675	490	751	139	0	1,380	0	185	110	295	98.1
平年	7/4	1,457	123	824	154	50	1,106	110	137	105	351	79.5
平年比	-14日	115	398	91	90	0	125	0	135	105	84	123

注)平年:収量は平成21年を除く前10か年の平均値。暦日の乾燥球重は平成21、22年を除く前10か年の平均値 (平成20年までは旧圃場のデータ)

上物:JA全農あおもりやさい出荷規格のA品、下物:B、C品

### (2) 畑作物

## アー小麦

平成26年9月21日に播種し、品種はネバリゴシを供試した。

出芽期は平年並みで、出芽率は89.7%だった。 越冬前は日照時間が長かったことから、茎数が 平年を上回った。越冬後は、圃場の消雪が平年 より19日早くなったことから、幼穂形成期は平 年より16日早い3月17日となった。その後の 気温は、平年並みから高めに推移し、出穂期が平年より15日、開花期が13日早まった。穂数が平年並みに多く、倒伏した。成熟期は平年より12日早い6月30日となった。

収量構成要素は、穂数703本/㎡(平年比99%)、 千粒重34.1g(同99%)、一穂粒数38.8粒(同153%)、 子実重74.7kg/a(同126%)となった。

表3 小麦の生育調査及び収量調査

年次	出芽期	出芽 良否	幼穂形成 期	止葉抽出 期	出穂期	開花期	成熟期	倒伏 程度	出穂期~ 成熟期所 要日数	稈長	穂長	穂数	一穂粒数	子実重
	月日		月日	月日	月日	月日	月日		日	cm	cm	本/㎡	粒/穂	kg/a
本年	9月27日	良	3月17日	5月2日	5月10日	5月20日	6月30日	4	51	95	8.8	703	38.8	74.7
平年	9月28日	良	4月2日	5月14日	5月25日	6月2日	7月12日	2.7	49	94	8.0	710	25.3	59.5
平年差•比	-1日		-16日	-12日	一15日	一13日	-5日	+1.3	+2日	101	110	99	153	126

注) 平年:平成20~26年(7か年)の平均値(平成24年産は出芽不良によりデータから除外) 倒伏程度は、0:無、1:微、2:少、3:中、4:多、5:甚 の6段階

### イ 大豆

5月15日に播種し、品種はおおすずを供試した。

気温が5月から8月は平年並みから、高めに推移し、9、10月は平年より低く推移した。主茎長・分枝数は平年を下回ったが、開花期は平年並の7月27日となった。

成熟期は平年より7日早い10月7日となった。 a当たり収量は30.4kg(平年比108)となった。収 量構成要素は、稔実莢数27.3莢/本(平年比96)、 一莢粒数1.49粒/莢(平年比106)、百粒重は37.9 g(平年比104)となった。

表4 大豆の生育調査及び収量調査

年次	開花期	成熟期	わい化病 株率	主茎長	主茎 節数	分枝 数	最下位着 莢節位高	稔実 莢数	一莢 粒数	全重	子実 重	百粒重	リットル 重
	月日	月日	%	cm	節	本/本	cm	莢/本	粒/莢	kg/a	kg/a	g	g
本年	7月27日	10月7日	1.4	65	14.7	2.4	19.7	27.3	1.5	57.3	30.4	37.9	740
平年	7月27日	10月14日	16.8	70	15.9	2.6	15.6	28.3	1.4	58.0	28.1	36.5	732
平年差·比	0日	-7日	0	92	92	91	126	96	106	99	108	104	101

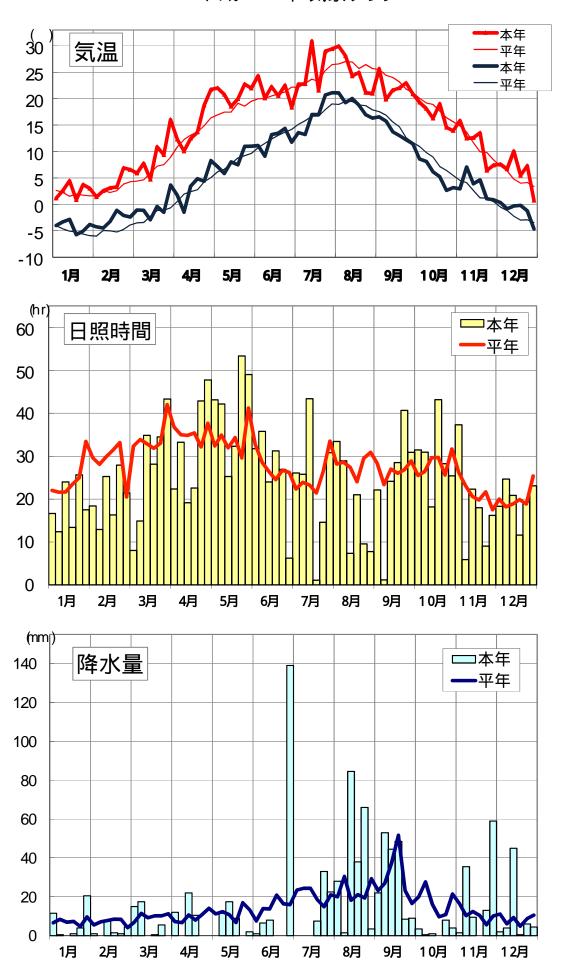
注) 平年:前7か年の平均値

# 4 平成 2 年気象表

平成	27年気象	表				平年: 1986年(S61)~ 2014年(H26)							
月	項目	最高気流	温()	最低気	温()	平均気流	温()	降水量	₫ (mm )	日照時間	(時間)		
/-			本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年			
1月	第 伴旬	0.7	2.7	-4.7	-4.0	-1.8	-0.7	8.0	6.6	21.5	22.0		
	第2半旬	1.0	2.3	-5.8	-4.6	-2.1	-1.0	3.0	8.4	20.4	21.6		
	第3半旬	-2.1	1.5	-9.9	-5.1	-5.5	-1.7	0.0	7.0	23.7	21.6		
	第4半旬	-0.9	1.9	-9.4	-5.2	-4.4	-1.4	2.5	7.3	18.1	23.4		
	第5半旬	2.6	1.7	-4.8	-5.6	-1.1	-1.7	5.5	4.7	19.9	24.9		
	第6半旬	3.1	1.6	-5.2	-5.9		-2.0	20.5	9.6	26.3	33.4		
	月平均·合計	0.7	2.0	-6.6		-2.7	-1.4	39.5	43.7	129.9	147.0		
2月	第 伴旬	1.4	1.6		-6.0	-1.2	-2.0	6.0	5.5	22.1	29.6		
	第2半旬	2.6	2.6		-5.0	-	-1.0	13.0	7.1	23.0	28.1		
	第3半旬	3.1	2.3	-3.2	-5.0		-1.2	9.0	7.8	18.5	29.8		
	第4半旬	3.3	2.6		-5.2		-1.2	22.0	8.5	29.5	31.5		
	第5半旬	6.9	3.8		-4.7	-	-0.3	0.0	8.4	39.0	33.2		
	第6半旬	6.6	4.3	-2.4	-3.9		0.4	0.0	4.1	26.0	20.5		
	月平均·合計	4.0	2.9	-2.9	-5.0		-0.9	-	41.4	158.1	172.6		
3月	第 伴旬	5.9	4.4	-1.1	-3.5		0.5		7.0	8.0	32.3		
	第2半旬	7.8	4.7	-1.1	-3.4		0.7	17.5	11.5	14.9	33.9		
	第3半旬	4.7	5.9				1.8	0.0	9.2	34.9	32.9		
	第4半旬	10.9	7.2	-0.4	-1.2		3.0	0.5	10.2	28.1	31.8		
	第5半旬	9.4	7.5	-1.5		3.6	3.1	5.5	10.2	34.5	33.0		
	第6半旬	16.0	8.9	3.7	-0.6		4.1	0.0	11.3	43.3	42.0		
	月平均·合計	9.1	6.4	-0.6			2.2	38.5	59.4	163.6	205.9		
4月	第伴旬	12.3	10.9		0.6		5.6	12.0	7.2	22.4	36.7		
	第2半旬	10.1	12.3	-1.5			7.1	0.0	6.7	33.2	35.0		
	第3半旬	12.5	13.1	3.5		7.6	7.6	22.0	10.6	19.2	34.8		
	第4半旬	13.7	13.7	4.9	2.8		8.2	10.5	8.0	(22.6)	35.4		
	第5半旬	18.8	14.9		4.3		9.5	0.0	10.9	(42.9)	32.1		
	第6半旬	21.7	16.4	8.3	5.1		10.6		14.1	(47.8)	37.7		
<u> </u>	月平均·合計	14.8	13.5			<u> </u>	8.1		57.4	187.9	211.8		
5月	第件旬	22.0	16.9				11.5		11.2		32.4		
	第2半旬	20.8	17.5				11.9		12.3		34.9		
	第3半旬	18.5	17.4	8.1	7.6		12.4	17.5	10.8	(25.3)	31.9		
	第4年旬	20.0	19.1	7.5			13.8		6.8	(32.3)	34.3		
	第5半旬	22.8	18.6				13.7		16.9	53.3	29.6		
	第6半旬	22.0	19.5				14.4		13.4	49.0	41.2		
	月平均·合計	21.0	18.2				12.9		71.4	245.2	204.3		
6月	第件旬	24.3	20.0		10.7		15.1		7.6	31.7	32.6		
	第2半旬	20.1	20.0		11.5		15.4		14.0	35.8	28.6		
	第3半旬	22.3	20.5				16.1		13.7	24.0	26.4		
	第4年旬	20.5	20.9				16.6		20.8	31.2	24.5		
	第5学旬	22.5	21.3				17.2		16.4	26.9	26.8		
	第6半旬	18.3	22.2				17.9		15.9	6.2	26.2		
	月平均·合計	21.4	20.8	12.2	12.6	16.4	16.4	154.5	88.4	155.8	165.0		

平成	2在気象	表		平年: 1986年(S61) ~ 2014年(H26									
月	項目	最高気流	温()	最低気	温()	平均気	温()	降水量	<u>t</u> (mm )	日照時間	(時間)		
/	半旬	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年		
7月	第 伴旬	22.7	22.2	13.6	15.1	17.9	18.3	0.0	23.5	26.1	22.3		
	第2半旬	22.8	22.9	13.2	15.8	17.8	19.0	0.0	24.4	25.8	23.9		
	第3半旬	30.9	23.7	17.0	16.7	23.7	19.8	0.0	24.4	43.4	23.3		
	第4半旬	21.5	23.3	17.0	16.7	18.2	19.6	7.5	18.7	1.1	21.4		
	第5半旬	29.0	25.3	20.7	18.0	23.9	21.2	33.0	14.9	14.6	26.4		
	第6半旬	29.4	26.5	21.1	19.0	24.5	22.4	22.5	21.0	30.8	33.5		
	月平均·合計	26.1	24.0	17.1	16.9		20.0	63.0	126.8	141.7	150.7		
8月	第 伴旬	29.9	26.6	21.1	18.9	25.2	22.3	28.0	20.0	33.4	28.2		
	第2半旬	28.1	27.0	19.2	19.5	23.3	22.8	1.5	30.5	28.9	28.6		
	第3半旬	24.3	26.9	20.0	19.5	21.4	22.8	84.5	18.2	7.4	27.4		
	第4半旬	25.0	25.7	18.8	18.8	21.2	21.8	38.0	21.1	21.0	24.0		
	第5半旬	21.1	26.4	17.0	18.7	18.9	22.2	66.0	19.4	9.6	29.5		
	第6半旬	21.0	25.7	16.3	17.9		21.5		29.4	7.8	30.9		
	月平均·合計	24.9	26.4	18.7			22.2		138.6	108.0	168.5		
9月	第 伴旬	25.7	25.5				21.2	22.0	23.3		28.3		
	第2半旬	19.8	24.4	15.8	16.9	17.7	20.4	53.0	26.9	1.2	23.4		
	第3半旬	21.6	24.0	13.7			19.5	44.5	37.7	24.1	27.0		
	第4半旬	22.0	23.2				18.7	48.5	51.7		26.0		
	第5半旬	23.0	21.8	12.2	12.6	17.4	17.1	8.5	23.2	40.7	26.8		
	第6半旬	20.9	21.1	11.5	11.7	15.9	16.3	9.0	16.6	30.9	28.9		
	月平均·合計	22.2	23.4	13.8	14.8	17.7	18.9	185.5	179.3		160.3		
10月	第 伴旬	19.3	20.1	8.6	10.9	14.3	15.4	3.5	20.0	31.5	25.5		
	第2半旬	18.1	19.2		9.8		14.3	0.5	27.7	30.9	26.4		
	第3半旬	16.3	18.9				13.9	1.0	16.2		29.6		
	第4半旬	19.0	17.7	5.2	7.2	11.9	12.3	0.0	9.8	43.2	29.7		
	第5半旬	14.6	16.4	2.7	6.4	8.5	11.4	8.0	10.9		25.6		
	第6半旬	13.9	15.7				10.5	4.0	21.4	25.4	31.7		
	月平均·合計	16.9	18.0				13.0		105.9		168.5		
11月	第 伴旬	15.9	14.9						16.6		26.3		
	第2半旬	12.5	13.7						10.3		23.2		
	第3半旬	12.6	11.7				7.1	9.5	12.5		20.6		
	第4半旬	13.5	10.0			8.9	5.4	0.0	10.4	18.0	19.8		
	第5半旬	6.4	9.8				5.4	13.0	5.6		21.7		
	第6半旬	7.4	8.4				4.3	59.0	10.2		17.5		
	月平均·合計	11.4	11.4				6.8	118.5	65.5		129.1		
12月	第 伴旬	7.6	7.3				3.2	2.0	11.1		20.0		
	第2半旬	6.7	6.4					4.0	6.1		18.2		
	第3半旬	10.1	4.8				1.2		9.3		18.8		
	第4半旬	5.5	4.0				0.5	0.5	4.9		19.9		
	第5半旬	7.3	4.1				0.6		8.7		18.9		
	第6半旬	0.7	3.4						10.5		25.4		
	月平均·合計	6.3	5.0	-1.1	-2.2	2.5	1.3	62.0	50.7	117.8	121.2		

## 平成 27年 気象グラフ



## 試験研究成果 普及情報の公表及び研修 技術協力

## 1 試験研究成果 普及情報

## (1)普及技術情報

区分	事 項 名
指導参考資料	だいこんのキスジノミハムシに対するテフルトリン粒剤の効果的な使い方
拍导多污臭杯	小麦品種「もち姫」の県南地域におけるコンバイン収穫適期
	にんにくの白斑葉枯病に対するシメコナゾール・マンゼブ水和剤(テーク水和剤)、フルジオキソニル水和剤(セイビアーフロアブル20)の使い方
	だいこんの白さび病に対するアゾキシストロビン・メタラキシルM粒剤(ユニフォーム 粒剤)の 使い方
	かぶの白さび病に対するアミスルブロム水和剤(ライメイフロアブル)の使い方
	ねぎのべと病に対するアミスルブロム・シモキサニル水和剤(ダイナモ顆粒水和剤)、シモキサニル・ベンチアバリカルブイソプロピ ル水和剤(ベトファイター顆粒水和剤)、アメトクトラジン・ジメトモルフ水和剤(ザンプロDMフロアブル)の使い方
	食用ぎくの灰色かび病に対するボスカライド水和剤(カンタスドライフロアブル)の使い方
	だいこんのキスジノミハムシに対するシアントラニリプロール水和剤 ( ベネビア CD) の使い方
農薬関係資料	にんにくのネギコガに対するアセタミプリド水溶剤(モスピラン顆粒水溶剤)の使い方
	にんにくのアプラムシ類に対するペルメトリン乳剤(アディオン乳剤)の使い方
	やまのいも(ながいも)のナガイモコガに対するシアントラニリプロール水和剤(ベネビアCD) 及びクロラントラニリプロール水和剤(プレバソンフロアブル 5) の使い方
	やまのいも(ながいも)のアプラムシ類に対するフロニカミド水和剤(ウララ DF) の使い方
	きゅうりのハダニ類に対するミヤコカブリダニ剤 (スパイカル EX)の使い方
	いちごのアザミウマ類に対するアカメガシワクダアザミウマ剤(アカメ)の使い方
	ほうれんそうのアシグロハモグリバエに対するスピノサド水和剤(スピノエース顆粒水和剤)の使 い方

### (2) 刊行物

ア 平成 26年度 試験成績概要集 (平成 27年 12月、60部発行)

イ 野菜研ニュース 12 (平成27年8月、ホームページ)

ウ 野菜研ニュース 13 (平成28年3月、ホームページ)

エニンニクイモグサレセンチュウ防除マニュアル (平成 28年 3 月、ホームページ)

オ もち小麦もち姫栽培マニュアル (平成28年3月、ホームページ)

### (3) 学会研究会等報告

著者、発表者	題名	雑誌名等 (号、ページ)	発表月	投稿先	論文 <i>/</i> 講 演要旨
町田創、岡田益己	温室のハイブリッド加 温設備の構成比を決定 する方法	農業環境工学関連 5 学会 2015年合同大会	H27.12	日本農業気 象学会	講演要旨
加賀友紀子山下一夫	青森県ヤマセ地域のタ マネギに発生する病害 について	北日本病害虫研 究発表会	H28.2	北日本病害 虫研究会	講演要旨
町田創	いちご「なつあかり」 の春定植栽培における 増収のための長日処理 方法	第52回農業電化研究会	H27.11	農業電化研究会	講演要旨

### (4)野菜研究所試験研究成果発表会

日時 平成 28年 2月 23日 (月)

場所 野菜研究所 大会議室 (六戸町大字犬落瀬字柳沢 91)

### 参集範囲

(独) 種苗管理センター、農家、農業関係団体、各市町村、県(農林水産部 各課、各地域県民局地域農林水産部、病害虫防除所、営農大学校)、産技 センター(関係農林部門研究所)

### 発表内容

・夏秋ギク「精の一世」の親株養成方法

農総研 花き部 研究管理員 東 秀典

・ナガイモ「園試系6」の良品質多収のための施肥管理

栽培部 研究管理員 鎌田 直人

・県南地域における小麦品種「もち姫」の刈取適期

品種開発部 研究管理員 前嶋 敦夫

・ダイコンのキスジノミハムシ多発ほ場での防除体系

病虫部 研究管理員 新藤 潤一

## (5)野菜研究所(農産物加工研究所、農林総合研究所藤坂稲作部)公開デー

日時 平成27年9月9日(月)

場所 野菜研究所 (六戸町大字犬落瀬字柳沢 91)

来場者 750人

### 内容

- ・ミニ講座、所内見学
- ・野菜販売、加工品など物産販売
- ・お米、加工品の試食
- ・農業機械、ハウス資材展示
- ・併催行事 にんにく共進会

## (6) 一般雑誌 普及誌 ラジオ

## ア 雑誌「あおもり農業」

題名	巻号	頁	所属	氏名
ナガイモの系統比較	66-4	76-78	品種開発部	柳野利哉
ニンニクの葉枯れ病のQo剤耐性菌に ついて	66-4	80-81	病虫部	加賀友紀子
にんにくの乾燥について ~煮え症 状が派生する要因~	66-5	44-46	栽培部	伊藤篤史
ダイコンのキスジノミハムシに対する フォース粒剤の播溝処理方法と防除効 果	66-5	84-86	病虫部	新藤潤一
ナガイモ施肥試験のこれまでと今後	66-6	46-49	栽培部	鎌田直人
えだまめの新品種育成への取り組みに ついて	66-8	36-37	品種開発部	前嶋敦夫

### イ 雑誌 農業電化」

題 名	巻号	頁	所属	氏名
いちご「なつあかり」の春定植栽培にお ける増収のための長日処理方法	農業電化 別冊 平成 27年 68-6	9-12	栽培部	町田創

## ウ ラジオ

月.日	発信先	発信内容	所属	氏名
5.16	RAB「農事放送」	ながいもの高品質・多収生産技 術について	栽培部	鎌田直人
6.13	RAB「農事放送」	夏秋いちごの高品質生産のポイントについて ントについて	栽培部	町田創
8.22	RAB「農事放送」	夏に寒じめ栽培の奨め	栽培部	町田創
11.28	RAB「農事放送」	寒じめ栽培のハウス管理のポイント	栽培部	町田創
1.16	RAB「農事放送」	ねぎの春まき栽培の育苗管理に ついて	栽培部	今智穂美

## 工 新聞

月日	発信先	発信内容	所属	氏名
4月	日本農業新聞	つくなが 1 号催芽による増収法	品種開発部	細田洋一
7月	農業共済新聞	つくなが 1 号の紹介	品種開発部	細田洋一
8月	農業共済新聞	あおもり短八の紹介	品種開発部	細田洋一
9月	日本種苗新聞	全日本野菜品種審査会ダイコン(夏マルチ栽培)	品種開発部	細田洋一

## (7) 表彰

	ı	T	
受賞者	月日	受賞名	概要 ( 又は理由 )
所長 岩瀬利己	6月 23日	全国場所長会研究功労 者表彰	野菜畑作の研究開発の長年の功績が高く評価されたもの
研究管理監 西澤登志樹 主任研究員 今智穂美	8月 28日	職員表彰 水稲品種「青天の霹靂」育成グループ及び あおもり米新品種「特 A」プロジェクトチーム	極良食味品種『青天の霹靂』の開発 とその特性を活かした栽培技術の体 系化による「特A」取得
主任研究員 今智穂美 研究員 町田 創	8月 28日	職員表彰 テンパリング乾燥技 術」開発チーム	ニンニクの貯蔵障害(くぼみ症等障害)を抑制するテンパリング乾燥技術の確立

## 2 研修 技術協力

## (1) 農業ドクター派遣

担当部所	担当者	内容	日付	依頼者
品種開発部	細田洋一	にんにくの小珠芽を利用した原 種生産	H27.10~ H28.8	全農青森県本部

## (2) 野菜研主催研修

担当部所	担当者	内容	日付	参加者
栽培部	今智穂美	ニンニク貯蔵試験結果観察会	H27.4.23	JA、県民局、農林総研
栽培部	町田創 岩瀬利己	夏イチゴ視察研修会	H27.4.14	生産者、JA、県民局、 農林総研
栽培部	町田創	イチゴ花芽検鏡講習会	H27.8.11	県民局、農林総研

## (3)講師派遣

担当部所	担当者	内容	日付	依頼者
所長	岩瀬利己	新規就農者ステップアップ研修		営農大学校
	岩瀬利己	全日本野菜品種審査会(ダイコン)審査	8月	社団法人日本種苗協会
	西澤登志樹	全日本野菜品種審査会(ダイコン)審査	8月	社団法人日本種苗協会
	町田創	イチゴ・トマトの小ロット流通 システムと地域ブランド化	12月	岩手大学三陸復興推進機 構
栽培部	今智穂美	JA津軽みらい常磐にんにく部会 研修会	12月	JA津軽みらいときわにん にく部会
	鎌田直人	JAOがるにしきたながいも部会 総会	1月	JAつがるにしきた
	今智穂美	短期講座:野菜の土づくり	3月	営農大学校
	前嶋敦夫	枝豆現地栽培講習会	7月	JAごしょつがる枝豆部会
	細田洋一	安全衛生研修会	8月	青森産技工業部門
品種開発部	細田洋一	伝統野菜栽培耕種会	8月	東青地域県民局
	前嶋敦夫	階上早生そば品質向上研修会	3月	階上町
	山下一夫 新藤潤一 加賀友紀子	病害虫及び防除に関する講義・ 実習	6月	営農大学校
	山下一夫 新藤潤一 加賀友紀子 青山理絵	病害虫及び防除に関する講義・ 実習	9月	営農大学校
	山下一夫、 新藤潤一	病害虫及び防除に関する講義	11月	営農大学校
病虫部	新藤潤一	JA津軽みらい常磐にんにく部会 研修会	12月	JA津軽みらいときわにん にく部会
	山下一夫	あすの地域農業を語る会:にん にくの栽培について	6月	十和田青果
	山下一夫	JANアいちご部会研修会、八戸いちご生産組合研修会	3月	八戸いちご生産組合
	山下一夫	にんにく革新技術実用化推進検 討会	3月	農産園芸課

# (4) 審査員派遣

担当部所	担当者	内容	日付	依頼者
그브 크 디카카	岩瀬利己	全日本野菜品種審査会	H27.8.11	日本種苗協会
所長	右湖州口	主口本野采品俚番直云	H27.8.11	口本性田協会 
	岩瀬利己	にんにく共進会審査会	H27.9.8	全農あおもり
	岩瀬利己	にんにく共進会審査会	H27.9.25	田子町
	岩瀬利己	チャレンジ研究審査	H27.10.9	青森産技
	岩瀬利己	ながいも共進会審査会	H28.1.18	全農あおもり
栽培部	西澤登志樹	全日本野菜品種審査会	H27.8.11	日本種苗協会
秋垣司)	西澤登志樹 今智穂美	にんにく共進会審査会	H27.9.8	全農あおもり
	今智穂美	堆きゅう肥品評会審査基準検討 会	H27.11.12	全農あおもり
	西澤登志樹	園芸施設共済部会	H28.3.8	青森県農業共済連合会
	西澤登志樹 鎌田直人	ナガイモ共進会審査会	H28.1.18	全農あおもり
品種開発部	細田洋一 對馬由記子	にんにく原種圃審査会	H27.4.10	全農あおもり
	細田洋一	にんにく優良種苗検査	H27.5.8	全農あおもり
	細田洋一 鈴木聡	ながいも原種検査会	H27.7.23	全農あおもり
	鈴木聡	ながいも原種検査会	H27.8.10	全農あおもり
	細田洋一	畑作物共済部会(ホップ)	H28.11.19	青森県農業共済連合会
	細田洋一	畑作物共済部会(大豆)	H28.2.24	青森県農業共済連合会
	細田洋一	畑作物共済部会(大豆)	H28.3.23	青森県農業共済連合会
<b>库</b> 由郊	山下一夫	にんにく原種圃審査会	H27.4.10	全農あおもり
病虫部	山下一夫	にんにく優良種苗検査	H27.5.8	全農あおもり

## (5)会議・研究会

日付	場所	主催者	担当者	内容
Ніл	六戸町、八戸		<u> </u>	夏イチゴ視察研修会
4.14	市	ター、野菜研究所	志樹、鎌田直人、	
	· =		町田創	
	六戸町	県農産園芸課	岩瀬利己、西澤登	ニンニク技術研修会
6.90			志樹、山下一夫、 鎌田直人、新藤潤	
	六戸町	県農産園芸課 	岩瀬利己、西澤登	ながいも技術研修会
6.30			志樹、鎌田直人、	
			新藤潤一、町田創	
7.6~ 8	秋田市	東北土壌肥料学会	今智穂美	東北土壌研究会
	六戸町	<u></u>	  岩瀬利己、西澤登	┃ ┃にんにく乾燥技術研修会
7 15	/ (/ -)	八尺小小上以火小	志樹、鎌田直人、	1270亿个起来较附加廖安
7.15			今智穂美、町田創	
	東京都	農研機構	│ 山下一夫、新藤潤	
7.31	宋 尔 印 	辰 听 1	一、青山理絵	SIP事業ユニット 5 中間成   績検討会
	= mT	<b>月典女団共知</b>		
0.4	六戸町	県農産園芸課	岩瀬利己、西澤登	ながいも栽培技術研修会
8.4	1		志樹、鎌田直人、   新藤潤一、町田創	
2.5	十和田市、三	上北地域県民局	西澤登志樹	次世代野菜実証ほ現地検討
8.5	沢市、七戸町			会
8.27~ 28		東北農業研究センター	鎌田直人、對馬由	東北農業試験研究推進会議
0.27 20	市	1 4 人曲七五七 17	記子	野菜夏期研究会
9.8	五戸町	JA全農あおもり	岩瀬利己、西澤登	にんにく共進会審査
	<b>₩</b> ₩+	<b>本</b> 心曲光元為2、5	志樹、今智穂美	<b>+ **</b> ** ** *** *** *** *** *** *** ***
9.1	盛岡市	東北農業研究センター	前嶋敦夫、鈴木聡	麦・なたね品種系統検討会
9.2~ 4	愛知県春日井 市	日本線虫学会 	青山理絵	日本線虫学会
0.0.5	千歳市、長沼	東北地域農業関係	岩瀬利己	東北地域農業関係場所長会
9.2~ 5	町、南札幌町	場所長会		議
9.10	山形市	東北農業研究センター	前嶋敦夫	東北ソバ研究会(ソバ
	成四十	口卡与多兴人	mt m &u	フォーラム)
9.14~ 15	盛岡市	日本気象学会	町田創	日本気象学会
9.15	東京都 仙台市	日本植物病理学会 日本植物病理学会東北	加賀友紀子	EBC研究会 東北支部会
9.28~ 29		古本恒初炳垤子云泉北 支部	川貝及和丁	ᄎᄱᅩᄱᅎ
9.30	五戸町	県農産園芸課	鎌田直人	ながいも若手塾集合研修
9.30				
	六戸町	県農産園芸課	岩瀬利己、西澤登	イモグサレセンチュウ研究
	1		志樹、山下一夫、	連携会議
10.14			新藤潤一、今智穂 美、加賀友紀子、	
			类、加黄及心 ] 、   青山理絵	
	名古屋市	農研機構	新藤潤一	  バンカー法による天敵利用
10.19~ 20	T 다 보니	RR WT 1茂 1円	初  膝 /闰  ̄	ハノカー法による大敞利用    の新展開
10.00	おいらせ町	もち小麦商品開発研究	岩瀬利己、細田洋	もち小麦実用技術検討会
10.20		会	一、前嶋敦夫	
10.26~ 27	秋田市	東北農研センター	加賀友紀子	病害診断研究会
10.30	盛岡市	岩手大学	町田創	夏イチゴセミナー
	盛岡市	日本植物防疫協会	山下一夫、新藤潤	新農薬実用化試験成績検討
11.5~ 6			一、加賀友紀子、	会
	成図主	古 小 典 ਧ わ い ク	青山理絵	<b>声ル曲</b> ボャラナ
11.12	盛岡市	東北農研センター	町田創	東北農研セミナー
11.19	六戸町	県農産園芸課	岩瀬利己、鎌田直	ながいも若手塾中間検討会
11.15	= * <del>-</del>	<b>日曲文字</b> ++=	人、町田創	
11.26	青森市	県農産園芸課	前嶋敦夫	そばの生産振興に係る連絡
11.20	<u> </u>			会議
11.27	東京都	東北農研センター	今智穂美	東北農研シンポジウム
11.27	十和田市	東北高度技術研究会	鎌田直人	北里大学研究室めぐり
12.16~ 17	東京都	日本植物生育調節剤研	鎌田直人	野菜除草剤成績検討会
12.10~ 17	<u> </u>	究協会		

<b></b>	1B cc	<u>→</u> /址 + <sub>2</sub>	+D \V +v	土点
日付	場所	主催者	担当者	内容
1.18	五戸町	JA全農あおもり	岩瀬利己、西澤登 志樹、鎌田直人	ながいも共進会
1.19	五戸町	JA全農あおもり	岩瀬利己、西澤登 志樹、鎌田直人	ながいもフォーラム
1.25~ 26	那覇市	農研機構	新藤潤一、青山理 絵	SIF抗線虫資材中間検討会
1.26	青森市	県農産園芸課	細田洋一、鎌田直 人	「攻めの農林水産業」推進 本部部会
1.28~ 29	盛岡市	東北農業研究センター	前嶋敦夫、鈴木聡	東北農業試験研究推進会議 畑作物部会
1.28~ 29	盛岡市	東北農業研究センター	新藤潤一、加賀友 紀子、加賀友紀子	東北農業試験研究推進会議 生産環境部会病害虫研究会
1.28~ 29	盛岡市	東北農業研究センター	今智穂美	東北農業試験研究推進会議 生産環境部会土壌研究会
2.1	津市	東北農業研究センター	山下一夫、細田洋 一、鈴木聡、	「東北・北陸地域における 新作型開発によるタマネギ の端境期生産体制の確立」 研究成果発表会
2.1	青森市	県総合販売戦略課	町田創	高鮮度農水産物販路開拓セ ミナー
2.2	青森市	県農産園芸課	前嶋敦夫	小麦・大豆の生産振興に係 る連絡会議
2.4~ 5	盛岡市	東北農業研究センター	岩瀬利己、西澤登 志樹、鎌田直人、 細田洋一、對馬由 記子、今智穂美、 町田創	東北農業試験研究推進会議野菜花き部会
2.10	仙台市	東北農業研究センター		東北ソバ研究会
2.10	青森市	県農林水産政策課、農 林総合研究所	西澤登志樹、今智 穂美、町田創	水田農業成果発表会
2.22	青森市	<b>県総合販売戦略課</b>	岩瀬利己、西澤登 志樹、町田創	高付加価値事業成果発表会
3.7	十和田市	上北地域県民局地域農 林水産部	岩瀬利己	「攻めの農林水産業」推進 上北地方本部会議
3.2	十和田市	上北地域県民局地域農 林水産部		上北野菜産地力向上会議
3.4	青森市	県農産園芸課	岩瀬利己、西澤登 志樹、山下一夫、 新藤潤一、加賀友 紀子	にんにく革新技術実用化推 進検討会
3.10~ 11	さいたま市	生研機構	鎌田直人	生研機構報告会、作物別野 菜分科会
3.15	青森市	東青県民局地域農林水産部	細田洋一	伝統野菜の活用促進に係わ る会議
3.17	八戸市	三八県民局地域農林水 産部	岩瀬利己、今智穂 美	八戸平原地域営農推進協議 会
3.21~ 23	岡山市	日本植物病理学会	加賀友紀子	日本植物病理学会大会
3.27	水戸市	日本作物学会	前嶋敦夫	日本作物学会大会
	·			·

## (6) 視察受け入れ

部所	案内件数	来所者数	視察、見学内容
所長、総務	5	12	イチゴ、ナガイモ、ニンニク栽培技術 施設
栽培部	11	142	イチゴ、ナガイモ、ニンニク栽培技術
品種開発部	3	58	小麦、なたね、ナガイモ品種開発
病虫部	5	43	病害虫全般
計	24	255	

## (7) 研修受け入れ

## ア 新規任用普及指導員専門技術向上研修

受け入れ部所	研修部門	人数	期間
栽培部 品種開発部 病虫部	野菜	1名	27.6.22~ 7.3 27.11.16~ 11.27

# イ インターンシップ

受け入れ部所	研修部門	人数	期間
栽培部 品種開発部 病虫部	野菜	2名	27.9.16~ 17

## 職員研修

## 1 国内研修

職・氏名	所属部所	研修内容	派遣先	派遣期間
研究員 加賀友紀子	病虫部	網羅的ウイルス解析技術 研修	岩手県生物工学 研究所	H27.5.28~ 29
研究員 加賀友紀子	病虫部	データロガ利用研修	太陽計器	H27.7.1~ 3
主任研究員 對馬由記子	品種開発部	数理統計短期集合研修 (基礎編)	農林水産技術会 議事務局筑波事 務所	H27.11.9~ 13
研究員 青山理絵	病虫部	線虫基礎研修	中央農業研究センター	H27.11.12~ 20
研究管理員 前嶋敦夫	品種開発部	大豆マーカー選抜研修	東北農研セン ター刈和野試験 地	H28.2.8

## 2 県・産技センター研修

### (1)青森県 ·産技本部 ·人材育成委員会

(1)青森県·產技本部·人材育成			
職・氏名	研修内容	派遣先	派遣期間
研究員 青山理絵	新採用者研修	青森産技	H27.4.9~ 10
主幹 工藤達哉	財務事務管理監督者及び出納員 研修	青森産技	H27.5.15
所長 研究管理監 岩瀬利己 西澤登志樹	研究所長研修	青森産技	H27.5.25
研究員 青山理絵	新採用者研修	自治研修所	H27.4.20~ 24
品種開発部長 研究管理員 細田洋一 鎌田直人 研究管理員 新藤潤一	SWOT初級研修	青森産技人材育成委員会	H27.6.15
総括研究管理員 山下一夫 品種開発部長 細田洋一	研究部長クラス研修	青森産技人材育成委員会	H27.6.29
主査 河村里子	社会保証・税制番号制度研修	青森県人事課	H27.7.13
主査 河村里子	主査第2部研修	自治研修所	H27.7.15~ 16
研究員 青山理絵	新採用者研究所視察研修	青森産技	H27.7.16~ 17
研究管理員 主査 鎌田直人 河村里子	メンタルヘルス及び安全衛生研 修会	青森産技安全衛生推進委員 会	H27.7.18
主幹 工藤達哉	施設管理担当者研修	自治研修所	H27.7.17
所長 研究管理監 岩瀬利己 西澤登志樹 品種開発部長 主幹 細田洋一 工藤達哉 研究員 町田創	コンプライアンス&外部資金研修	青森産技人材育成委員会	H27.7.29
主幹 工藤達哉	主幹研修	自治研修所	H27.9.3~ 4
研究管理員 前嶋敦夫	鳥インフルエンザ机上演習	青森県畜産課	H27.9.11
研究管理員 主任研究員 前嶋敦夫 對馬由記子	V cup研修	青森産技人材育成委員会	H27.9.17
研究管理員 研究管理員 前嶋敦夫 新藤潤一	SWOT中級研修	青森産技人材育成委員会	H27.10.8~ 9
所長 研究管理監 岩瀬利己 西澤登志樹 研究管理員 前嶋敦夫	青い森の良品発掘フォーラム	青森産技人材育成委員会	H27.10.16
研究管理監 西澤登志樹	知財関係研修特別講演会	青森産技人材育成委員会	H27.10.21
研究員 青山理絵	新採用者研修	自治研修所	H27.10.27~ 30
研究管理監 品種開発部長 西澤登志樹 細田洋一	人事評価研修	青森産技	H27.12.8
研究管理員 鎌田直人	自主研修 ドローンの利用法	青森産技	H27.12.25
主任研究員 主任研究員 對馬由記子 今智穂美 研究員 加賀友紀子	自主研修 薬品管理	青森産技/農林総合研究所	H28.2.1
主任研究員 研究員 今智穂美 町田創	自主研修 英語論文の書き方セ ミナー	青森産技 /農林総合研究所	H28.2.12
研究管理員 主任研究員 前嶋敦夫 今智穂美 研究員 町田創	農林系研究における現地実証試 験の進め方に関する研修会	青森産技 /農林総合研究所	H28.3.7

## (2) 野菜研究所独自研修

項目	研修内容	講師	研修期間
野菜研セミナー	労働安全衛生講習会	所長 岩瀬利己	H27.4.1
野菜研ほ場案内説明会	視察案内講習会	担当研究所員	H27.6.5
野菜研セミナー	ウイルス学セミナー	東京農工大 准教授 小松 健	H27.7.22
野菜研セミナー	薬品取り扱い研修	品種開発部長 細田洋一	H27.10.7
AED研修	A E D取扱の実際	六戸町消防署	H27.9.1
野菜研セミナー	社会保障・税制番号制度	主査 河村里子	H28.2.1

## 種苗の生産と配付

## 1 作物の原原種の採種

種	類	品	種	面積	採種量	備考
				(a)	(kg)	採種場所等
そば		階上早生		10	37	野菜研究所

## 2 種苗等の配付

## (1)種苗の配付

種類	品種	数量(kg)	配付先
そば	階上早生	500	青森県農産物改良協会
なたね	キザキノナタネ	15	青森県農産物改良協会
ながいも	園試系 6	228 むかご	全農あおもり
にんにく	福地ホワイト	400 りん球	全農あおもり
	(黒石 孫統)	珠芽	

## 注.旧年産の種子も含む。

## 資格取得

職・氏名	所属部所	資格内容
技能技師 沼畑至宏 技能技師 相坂和幸	栽培部	有機溶剤作業主任者
品種開発部長 細田洋一	品種開発部	有機溶剤作業主任者
研究員 加賀友紀子	病虫部	有機溶剤作業主任者
技能技師 沼畑至宏 技能技師 相坂和幸	栽培部	玉掛け技能

## VI 総 務

### 1 位置・土地・建物

青森県上北郡六戸町大字犬落瀬字柳沢91

北緯 40° 38′ 東経 141° 21′ 標高 53m

土地3,557 a建物敷地138 a畑206.6 a道路・その他1,353 a建物9,177㎡

### 2 所掌事務・分掌事務

- (1) 所掌事務
- ア 野菜及び畑作物の試験研究に関すること。
- イ 野菜及び畑作物の種苗の育成及び配布に関すること。
- (2) 栽培部の分掌事務
- ア 野菜研究所の庶務に関すること。
- イ 野菜の栽培改善の試験研究に関すること。
- ウ 野菜に係る農業機械及び農業施設の利用及び改善の試験研究に関すること。
- エ 野菜の施肥改善、作物栄養の試験研究に関すること。
- オ 野菜の鮮度保持及び貯蔵の試験研究に関すること。
- (3) 品種開発部の分掌事務
- ア 野菜及び畑作物の品質改良の試験研究に関すること。
- イ 野菜の品種の適応性等の試験研究に関すること。
- ウ 野菜の種苗生産に関すること。
- エ そば、なたねの原原種の生産及び原種の増殖に関すること。
- (4) 病虫部の分掌事務
- ア 野菜の病害虫防除の試験研究に関すること。

### 3 組織・職員

(1) 組織・職員数

人員:職員26名(プロパー職員7名、派遣職員6名、非常勤職員5名)

区 分	研究職員	事務職員	技能技師	非常勤職	計
				員	
所 長	1				1
栽 培 部					
研 究	4			2	6
庶務・業務		<b>※</b> 2	3	1	6
品種開発部	4				4
病 虫 部	4			3	7
計	13	<b>※</b> 2	3	6	24

<sup>※</sup>農産物加工研究所と兼務

## 4 事務分担

## (1) 所長

	特	命	事	項	職	名	氏	名
1	所の管理、運営の総	※括に関っ	けること		所	長	岩瀬	利己

## (2) 栽培部 (試験研究)

研究管理監(部長) 西澤 登志樹

分 担 事 務	主 担	副 担
1 栽培部に係る業務の総括に関すること 2 野菜の栽培・貯蔵に関する渉外、指導及び研修全般に関す ること	部長 (研究管理監) 西澤 登志樹	研究管理員 (副部長) 鎌田 直人
1 部に係る業務の総括補佐に 関すること 2 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術のうちナガイモに 関すること 3 ながいも産地生産力レベルアップ事業に関すること 4 野菜の生育調節剤・除草剤に関すること 5 加工・業務用野菜に関すること	副 部 長研究管理員 鎌田 直人	部 長 西澤 登志樹 主任研究員 今 智穂美 研究員 町田 創
1 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術のうちニンニクに 関すること 2 水田農業を核とした土地利用型農業技術の現地実用化、青森にんにく安心技術確立事業のうち貯蔵品質に関すること 3 新たな土壌管理による高品質農産物生産技術に関すること 4 しじみ・ひめます産地力アップ対策事業に関すること 5 野菜の貯蔵・鮮度保持に関すること 6 作物栄養、土壌管理に関すること	主任研究員 今 智穂美	研究管理員 鎌田 直人 研究員 町田 創
1 青森ブランド野菜販売力強化のための新作型開発研究のうち夏秋イチゴに関すること 2 なつあかり高付加価値技術創出実証事業に関すること 3 冬の農業生産体制強化事業に関 すること 4 野菜の機械及び機械化に関すること 5 農業施設、資材の利用に関すること 6 気象観測・作況試験・生産情報の編集に関すること	研究員 町田 創	研究管理員 鎌田 直人 主任研究員 今 智穂美
1 試験研究の補助に関すること	非常勤労務員 佐藤 渚 松村 沙織	

研究管理監(部長) 西澤 登志樹

		研究官埋監(部 長	) 四澤 登志樹
	分 担 事 務	主担	副担
1	庶務に係る業務の総括に関すること	部 長	主 幹
2	印章の管守に関すること	(研究管理監)	工藤 達哉
3	行事予定の管理に関すること	西澤 登志樹	
4	労働安全衛生に関すること		主 査
5	情報公開及び個人情報保護等に関すること		河村 里子
6	セクハラ相談に関すること		
1	予算執行管理に関すること	主 幹	主 査
2	収入に関すること	工藤 達哉	河村 里子
3	支出契約決議に関すること		
4	財産及び物品の管理に関すること		非常勤労務員
5	車両の配車等に関すること		澁谷 美幸
1	職員の服務に関すること	主 査	主 幹
2	職員の福利厚生に関すること	河村 里子	工藤 達哉
3	労働安全衛生に関すること		
4	非常勤職員等に関すること		非常勤労務員
5	庶務関係の報告に関すること		澁谷 美幸
6	庁舎内外の清掃・整備に関すること		
1	文書の収受、発送及び保管に関すること	非常勤労務員	
2	服務関係書類の整理に関すること	澁谷 美幸	主 幹
3	物品・図書の管理の補助に関すること		工藤 達哉
4	経理事務の補助に関すること		
5	復命書及び旅行管理簿の整理に関すること		主 査
			河村 里子
1	農場運営方針の推進に関すること	技 能 技 師	
2	耕作作業の改善・合理化に関すること	山本 勝浩	
3	農場員の作業指導に関すること	沼畑 至宏	
4	農場機械等の整備及び管理に関すること	相坂和幸	
1	車両の整備に関すること	主幹	
		工藤 達哉	技能技師
			山本 勝浩
			沼畑 至宏
			相坂 和幸

	分 担 事 務	主 担	副担
1	品種開発部に係る業務の総括に関すること	部 長	副部長
2	品種開発・種苗生産の渉外、指導及び研修等に関すること	細田 洋一	(研究管理員)
3	農場管理委員会に関すること		前嶋 敦夫
			主任研究員
			對馬由記子
1	伝統野菜活用促進事業に関すること	部 長	研究管理員
2	「南部太ねぎ」の特性に関する栽培試験に関すること	細田 洋一	前嶋 敦夫
			主任研究員
			鈴木 聡
1	エダマメ優良品種開発に関すること	副部長	主任研究員
2	畑作物優良品種の選定に関すること	(研究管理員)	對馬由記子
3	畑作物原原種・原種の生産・供給に関すること	前嶋 敦夫	
4	ソバ育成系統特性評価に関すること		主任研究員
5	もち性小麦の生産振興に関すること		鈴木 聡
6	畑作物作況調査(小麦)に関すること		
1	ニンニク優良品種開発に関すること	主任研究員	部長
2	特産野菜原原種維持増殖事業(ニンニク)に関すること	對馬由記子	細田 洋一
3	イチゴ優良品種の開発に関すること		
4	ナガイモ収集保存に関すること		主任研究員
5	ニンニク収集保存に関すること		鈴木 聡
1	ナガイモ優良品種開発に関すること	主任研究員	部 長
2	特産野菜原原種維持増殖事業(ナガイモ)に関すること	鈴木 聡	細田 洋一
3	ナタネ育成系統特性評価に関すること		
4	畑作物作況調査(大豆)に関すること		研究管理員
5	業務・加工用に適したタマネギ品種及び栽培技術の開発に関		前嶋 敦夫
-	すること		

総括研究管理員(部長)山下 一夫

	The state of the s	口切九百柱貝(即	ДЛШТ Д
分	担事務	主 担	副担
1	病虫部に係る業務の総括に関すること	部 長	副部長
2	病害虫防除の渉外、指導及び研修等に関すること	(総括研究管理員)	(研究管理員)
		山下 一夫	新藤 潤一
1	青森にんにく安心技術確立事業のうち土壌病害防除対策の確	部 長	研究管理員
	立研究に関すること	山下 一夫	新藤 潤一
2	業務加工用に適したタマネギ栽培技術開発事業の病害虫防除		
	に関すること		研究員
3	たっこにんにくの弱毒ウイルスの開発に関すること		加賀 友紀子
4	新農薬開発試験(殺菌剤)に関すること		
1	天敵等を利用した野菜害虫防除技術の開発に関すること	副 部 長	部 長
2	ダイコンのキズジノミハムシなど特産野菜害虫の発生生態の	(研究管理員)	山下 一夫
	解明及び防除技術に関すること	新藤潤一	
3	青森にんにく安心技術確立事業のうちイモグサレセンチュウ		研究員
	防除対策マニュアルに関すること		青山理絵
4	新農薬開発試験(殺虫剤)に関すること		
5	虫害防除の指導及び研修等に関すること		
1	土壌くん蒸消毒に替わる特産野菜の土壌病害虫防除技術に関	研究員	部 長
	すること	加賀 友紀子	山下 一夫
2	ウイルス病害の感染制御技術に関すること		
3	新農薬開発試験(殺菌剤)に関すること		研究員
4	病害防除の指導及び研修等に関すること		青山理絵
	7,1 E 10 10 11 1, 10 C G 9, 10 1, 1 E 10 7 G E E		11
1	ニンニク土壌病害虫のうちイモグサレセンチュウの診断技術	研究員	部 長
	と防除に関すること	青山 理絵	山下 一夫
2	特産野菜の土壌病害・線虫害の防除技術に関すること		研究管理員
3	新農薬開発試験(殺線虫剤)に関すること		新藤 潤一
			研究員
			加賀 友紀子
			774 24 ME 1
1	試験研究の補助に関すること(品種開発部と兼務)	非常勤労務員	
		吉田善枝	
		上村文子	
		五十嵐 あこ	
Щ		1 /24 00	1

## 5 平成27年度予算

## (1)全体予算(決算額)

(単位:千円)

目・細目	27年度	7	との 財 源	泵
	決算額	国庫	その他	県交付金
職員人件費	123, 961			123, 961
研究業務費 (開発、支援研究)	5, 123			5, 123
研究費交付金事業費	9, 105			9, 105
受託研究費	14, 170		14, 170	
法人調整費	1, 267			1, 267
管理運営費	35, 242			35, 242
	-			
計	188, 868		14, 170	174, 698

## (2) 研究業務費 (開発研究、支援研究)

区分	整理番号	分類	研究課題名・事業名	期間		H27	7予算额	頁(千円)
				始	終	予算	収入	交付金
開発	野 Ⅱ - 1	(2)イ①	青森ブランド野菜販売力強化の	26	30	981	0	981
			ための新作型開発					
開発	野 Ⅱ - 2	(1)イ④	特産野菜優良品種の育成	26	30	1,052	0	1,052
開発	野 Ⅱ - 3	(3)イ②	気象変動や生物多様性に適応し	26	30	1,696	0	1,696
			た特産野菜の安全・安心な病害					
			虫管理技術の研究開発					
開発	農 Ⅱ -	(3)ア②	新たな土壌管理による高品質農	27	30	200		200
			産物生産技術の開発研究					
小計						3,929	0	3,929
支援	農 Ⅱ -101		農作物の生育状況等に関する調	26	30	61	0	61
			查					
支援	農 Ⅱ -102		本県に適する優良品種の選定	26	30	283		283
支援	農 Ⅱ -103		農作物の種苗等生産	26	30	705		705
支援	農 Ⅱ -104		遺伝資源の維持・収集	26	30	145	_	145
小計						1, 194		1, 194
計						_		5, 123

## (3) 競争的資金研究

No.	研究課題名	実施期間	金額	委託元
			(千円)	
1	SIP(戦略的イノベーション創造プログ	$\mathrm{H26}\!\sim\!30$	3,900	(独)農研機構中央農業研
	ラム)「次世代農林水産業創造技術」「持			究センター
	続可能な農業生産のための新たな総合			
	的植物保護技術の開発			
2	これまでの事業/ヒト介入試験に基づく	${\rm H}25\!\sim\!27$	500	青森県立保健大学
	もち小麦からの新食感食品開発			
3	業務加工用に適したタマネギ品種及び	$H26 \sim 30$	1,962	独 ) 農 研 機 構 中 央 農 業 研
	栽培技術の開発事業費			究センター
計			6, 266	

## (4) 受託研究・補助事業 (国・自治体)

No.	研究課題名	実施期間	金額	委託元
			(千円)	
1	「たっこにんにく」をまもる弱毒ウイ	$\mathrm{H24}\!\sim\!28$	950	田子町
	ルスの利用技術開発			
2	青森にんにく安心技術確立事業	$\mathrm{H26}\!\sim\!27$	10, 325	農産園芸課
3	ながいも産地生産力レベルアップ事業	$\mathrm{H26}\!\sim\!27$	1,947	農産園芸課
4	冬の農業生産体制強化事業	$\mathrm{H26}\!\sim\!27$	650	農産園芸課
5	なつあかり高付加価値技術創出実証事	$\mathrm{H26}\!\sim\!27$	1,900	総合販売戦略課
	業			
6	しじみひめます産地力アップ	$\mathrm{H27}\!\sim\!28$	578	三八地域県民局
7	寒冷地におけるそば育成系統の特性評	$\mathrm{H25}\!\sim\!26$	194	東北農業研究センター
	価			
8	寒冷地におけるなたね育成系統の特性	$\mathrm{H26}\!\sim\!27$	200	東北農業研究センター
	評価			
9	「南部太ねぎ」の特性に係る栽培試験	$\mathrm{H26}\!\sim\!27$	240	南部町
計			16, 984	

## (5)受託研究(民間・団体等)

No.	研究課題名	実施期間	金額	委託元
			(千円)	
1	新農薬の実用化試験	H27	7, 261	(社)青森県植物防疫協会
2	新植物調節剤実用化試験	H27	216	(財)日本植物調節剤研究
				協会
3	イモグサレセンチュウ発生圃場におけ	$\mathrm{H26}\!\sim\!27$	196	コープケミカル(株)
	る」石灰窒素の防除効果の検討			
4	にんにくにおける被覆マルチの違いに	$\mathrm{H26}\!\sim\!27$	240	全農あおもり
	よるクロールピクリンガス濃度の影響			
	に関する研究			
5	だいこんのキスジノミハムシに対する	H27	400	シンジェンタジャパン(株)
	フォース粒剤の効果的な処理方法の検			
	討			
計			8, 313	

## (6) 青森県産業技術センター委員会

委員会	委員
労働安全委員会	鈴木聡
広報委員会	新藤潤一
人材育成委員会	西澤登志樹
商品PR委員会	前嶋敦夫

VII 野菜研究所圃場利用図(平成27年度春夏作)

